

第2分科会 研究発表資料

「施設ボランティアの企画・運営への参加による事業活性化の試み」

- ユース・パートナーキャンプでの取り組み -

国立赤城青少年交流の家 主任企画指導専門職 石原敏晴

はじめに

青少年が体験活動の中で積極的に参加するための要因として、「対象への興味」や「上達の実感」だけでなく、「周りの人に認められているという実感」や「人の役に立っているという有能観」といった青少年の社会参加・自立に必要な要素も大切であると考えられる。また、意欲の面から見ると「さんのようになりたいというあこがれ」も重要な要素と考える。

そこで、運営補助という位置づけだった施設ボランティアを企画段階から参加させようと考えた。そうすることで、施設ボランティアに対しては、これまで培ってきた経験を基にやりがいのある活動を用意し、また、一般参加者に対しては、講師や職員より身近なお手本を提示することができる。結果、事業の活性化と施設ボランティアの組織化を図れるのではないかと考えた。

今回、4年間継続しており、キャンプ自体の流れを多くの施設ボランティアが理解している「ユニバーサルキャンプ」を対象事業とした。これを「ユース・パートナーキャンプ」として2年間で施設ボランティア主体の事業になるよう挑戦した。

研究内容

1 「ユニバーサルキャンプ」から「ユース・パートナーキャンプ」へ

(1) ユニバーサルキャンプ

平成14年度に完成したバリアフリー対応のキャンプサイトを利用して、健常者も障害者・高齢者も分け隔てなく一緒に家族で楽しめる1泊2日のキャンプをしようというのがユニバーサルキャンプの趣旨である。立案運営に当たっては、専門性が問われるため実行委員会形式を採り、具体的な運営については、ボランティアを募り実施した。併せて、ボランティア育成も考え、実施2週間前に事前研修会を1泊2日で実施し、1泊2日のキャンプ終了後片付けやふりかえりのためにさらに1泊する日程であった。

キャンプ当日の中で、ボランティアが担当するのは、食事作りと遊びコーナー運営、それに、介護・支援の大きく3つの部分であった。その他のプログラムは、講師や外部研修指導員を呼んだり、熱気球や引き馬をお願いしたりして実施した。運営は本所職員と実行委員が担当した。

企画としては、好評で、参加者やボランティアのリピーターも多かった。ボランティアとして参加した者たちの中には、障害者施設の子どもたちをキャンプに連れて行く活動をしている者もいる。

(2) ユース・パートナーキャンプへの移行

企画運営に施設ボランティアを参加させる場合、まるきり新しいプログラムを作らせるには、施設ボランティア間の共通理解を図るための時間をかなり要することが予想される。そのため、多くの施設ボランティアが共通経験を持つユニバーサルキャンプでの活動を基にその運営方法やねらいなどをリメイクしていくことを選択した。

以下、ユニバーサルキャンプとユース・パートナーキャンプとの違いを表1に表す。

<表1> ユニバーサルキャンプとユース・パートナーキャンプとの違い

	(旧)ユニバーサルキャンプ	(新)ユース・パートナーキャンプ 2年目
趣 旨	健常者も障害者・高齢者も分け隔てなく一緒に家族で1泊2日のキャンプを楽しめるようにする。	特別支援教育・福祉に関するボランティアの育成。ボランティアのステップアップと組織化。
主募集	キャンプ参加者 障害者の家族、高齢者の家族、健常者の一般の家族	ボランティア受講者 何らかのボランティア経験のある者
従募集	ボランティア受講者 何らかのボランティア経験のある者	キャンプ参加者 知的障害児、あるいは軽度発達障害児とその家族
企画運営	キャンプ専門家を中心とした実行委員会形式	トレーニングプログラムとキャンプ日程の大枠等は担当専門職が作成。日程枠内での進行や活動内容とその準備は施設ボランティアが担当。 1年次は、福祉と特別支援教育の専門家を加えた実行委員会に施設ボラを参加させた。
メインキャンププログラム	・実行委員が前面に出た運営 ・遊びコーナーと食事作りはボランティア。それ以外の各プログラムは講師や外部研修指導員を呼んだり、熱気球や引き馬をお願いしたりして実施。	・進行・運営班の施設ボランティアが中心となった運営 ・引き馬以外、すべてのプログラムは施設ボランティアの立案と運営。(ただし、必要に応じて、たたき台を担当専門職が提案)
メインキャンプでのボラの支援に関するサポート	気の付いた範囲で職員がボランティアに対して指導助言を行った。	特別支援教育の専門家による観察と指導助言を実施した。
事前研修会	障害者理解や救急救命法、キャンプ準備など幅広い研修を実施した。	同日に「説明会」を実施し、実際にあった体験を基に、パートナーの障害理解、支援方法の研修、それから、キャンプ運営準備を行った。
経 費	約100万円	約30万円

2 専門性(特別支援)からの配慮とキャンプデザイン

(1) 対象とする障害を絞る

その支援の対象をユニバーサルの理念に立って、すべての障害者・高齢者とその家族、さらに健常者の家族とした場合、受講者に対して事前研修で取り上げる内容が広範囲となり、実践的な研修の深まりが期待できない。そこで、その支援の対象を絞り、知的障害児や軽度発達障害児とその家族を実質的な対象とした。

(2) 相談機関との連携・タイアップ

福祉の分野では、各都道府県に発達障害者支援センターが設置されている。また、教育の分野では、養護学校(特別支援学校)に相談担当が設けられている。そこで、群馬県発達障害者支援センターと群馬大学教育学部附属特別支援学校の特別支援教育サポートセンターの協力を取り付けた。

1年次は、その両者から一名ずつ実行委員を出していただいた。2年次は、群馬県発達障害者支援センターからは情報提供を、群馬大学教育学部附属特別支援学校の特別支援教育サポートセンターからは、講師を出していただいた。また、両機関の相談利用者に対して募集紹介をしていただいた。

(3) 事前説明会の実施

自閉的傾向がある場合や、軽度発達障害の二次障害で不登校気味になっている場合などでは、初めての場所でいきなり宿泊することはかなりのストレスが予想される。実際、ユニバーサルキャンプに参加申込みをした不登校の状況にあった3名は当日キャンセルとなった。そこで、支援者に対する事前研修会の日程の中に事前説明会を設け、本人とその家族に、宿泊・活動する場所を見てもらい、また、パートナーと顔合わせをしてもらうことで、不安の解消を図り、当日スムーズに参加できるようにした。

(4) 研修プログラムの改善

一連の研修プログラムを通して、「対象への興味」や「上達の実感」がなされる必要があると考えた。

「対象への興味」という視点からは、研修に具体性を持たせることを考えた。事前研修会において、障害や支援について教科書的な一般論の研修ではなく、まず、自分のパートナーとなる障害児本人と事前説明会の時間を過ごしすることで、その本人を通してその子の障害や具体的な支援の方法について研修ができるようにプログラムを組んだ。【別紙日程表参照】その情報収集については、保護者に出していただく「要望シート」と電話での確認、それに、保護者に了解を受けての学校・相談機関からの情報提供で行った。

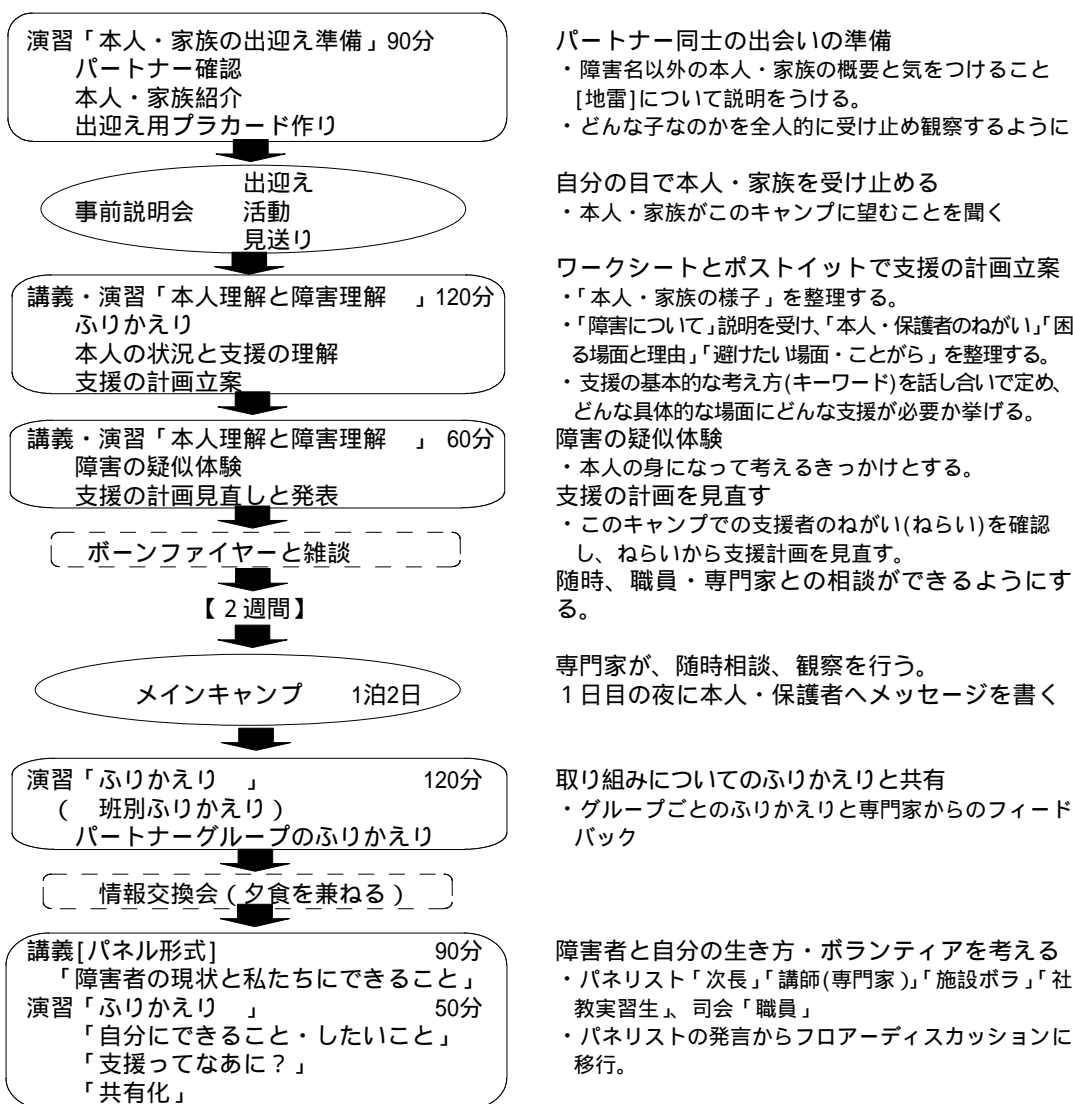
「上達の実感」という視点からは、「研修による支援での課題把握と対応方法の明確化」「成し遂げたことに対するフィードバック」の2つを押さえた。

「研修による支援での課題把握と対応方法の明確化」では、事前研修会において、図1のような研修プログラムを実施した。これは、小・中学校特別支援教育で

の担任教師に対する個別指導計画立案についての相談支援の経験を基に作成したものである。

「成し遂げたことに対するフィードバック」があつてこそ、体験が経験へと昇華するものとする。そこで、細かくは各研修プログラムの節目で参加者同士の共有化の時間を設けること、そして、この企画での活動全体をふりかえり共有化するとともに、自分の人生をもふりかえる時間を設けることを考えた。このふりかえりを大切にすることで、「上達の実感」や「困難の克服」といったものが、「周りの人に認められているという実感」や「人の役に立っているという有能観」に育っていくものとする。このふりかえりを参加者個人に委ねるのではなく、プログラム化することで集団での相互作用も利用できるとともに、集団の仲間作りが可能となる。

< 図1 > 研修プログラム概略図



実施してみて、パネルディスカッションの中で に話が発展したため、そのまま時間延長した。残った時間は施設ボラ(リーダー4名)から参加者へのフィードバックの時間とした。

(5) 専門家による観察と指導助言

不安解消や対応に困ったときの相談・支援担当があることで、小さな失敗を決定的な失敗に発展させることなく、困難を乗り越える体験を提供できる。本来的にはその役目を所員が行うべきではあるが、実際に動き出したときには、運営に携わったり、突発的な事態に対応したりして、目が行き届かなくなるのが現状である。そこで、事前研修会で講師をお願いした専門家にキャンプ中、終日、観察とともに、相談された場合に指導・助言できる体制を採った。支援に詰まったときに気軽に相談できるようにするだけでなく、ふりかえりのときに、支援で良かった点をフィードバックしていただいた。(言い方としては、支援者の良かったことを直接ほめるのではなく、障害児本人の変化・成長について、その支援の関連性・有効性とからめて述べるようにした。)また、専門家に情報が集まるように、夜の運営者によるミーティングで、参加者情報とその対策について共有化した。

3 施設ボランティアへの働きかけと役割設定・時間設定

(1) キャンプデザインと施設ボランティアの役割設定

障害者とその家族のキャンプの場合、障害者本人への支援だけでなく、キャンプとして成り立つためにはキャンプ全体の運営や資材準備や食事作り等の仕事も大切な活動となる。そこで、ボランティア受講者にパートナーグループ割とは別に、ユニバーサルキャンプ同様、「運営・進行班」「食事作り班」「資材・支援班」の3つの班に分け、活動を担ってもらうこととした。

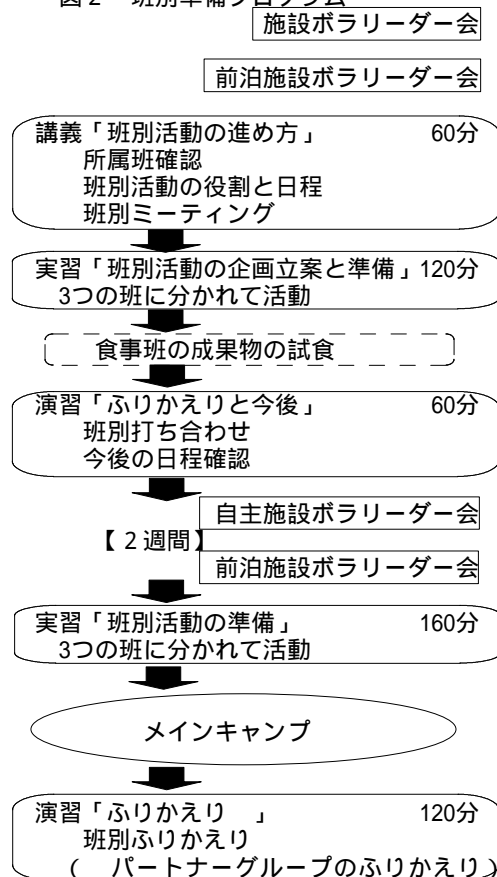
「運営・進行班」は、開会式・閉会式からキャンプファイヤー、遊びコーナーまで、キャンプの進行全体を運営・進行する。

「食事作り班」は、1日目の夕食と2日目の朝食の食事作りと配膳・片付けの指示を担当する。

「資材・支援班」は、主に遊びコーナーで使用する物品を準備する。また、他の班の仕事で本人への支援が手薄になった際には、責任を持って支援に当たる。

これらの班活動を施設ボランティアが中心となって進められるように働きかけを行った。なお、別紙日程表(発表当日配布)に、施設ボランティアが主体となって進行するイベントには 印を付け示した。

図2 班別準備プログラム



(2) 3つの班の仕事の準備計画

施設ボランティアが主体となって進行する3つの班の仕事の準備を演習として実施したが、そのプログラムを図2に示す。

(3) 施設ボランティアへの働きかけ

1年次の働きかけと施設ボランティアの取り組み

ユース・パートナーキャンプに変更して1年目は、実行委員会形式での取り組みとなった。そこに、前回参加した者の中から3名の施設ボランティアに参加してもらい、それぞれ、3つの班を担ってもらった。また、1年目は、キャンプのイベントの多くを実行委員や本所職員が担当していたが、これら3名の施設ボランティアと共同して計画立案、運営に当たれるようにした。

2年次の立案までの働きかけ

実行委員会形式を解消する方向を決め、1年目に中心的に活躍した施設ボランティアに「一緒にユース・パートナーキャンプを作ってみないか」と打診をし始めた。

また、すべてを施設ボランティアに企画を考えさせることは課題が大きくなりすぎるので、支援者としての研修プログラムと、班別活動のための事前プログラムとに分けて大枠の立案をするとともに、キャンプ当日、施設ボランティアが進めるイベントの時間、場所、ねらい等を明確にし、施設ボランティアに示せるようにした。

施設ボランティアのリーダー選定と働きかけ

キャンプイベントの多くを施設ボランティアが主体となって活動しやすいようにと、「運営・進行班」は2名、他の班は1名ずつの合計4名をリーダーとして選定しお願いした。選定に当たっては、4人のこれまでの取り組みの様子だけでなく、4人間の相性なども考慮に入れた。

事前研修会までの働きかけ

各リーダーとの電話での連絡などは続けていたものの、夏休み期間になったため、なかなか日程がとれず、リーダー会を事前研修会2週間前に実施した。そこで、事業のねらいを確認するとともに、日程案を示してキャンプ当日、施設ボランティアが進めるイベントの時間、場所、ねらい等を確認した。また、遊びコーナーのたたき台と食事メニューのたたき台を示し、4名のリーダーに話し合っ決めていくこと、自由に決めて良いが、決まったことは報告することと必要となる物品は直ぐに言うことを伝えた。

4名のリーダーは事前研修会の前日に入所し、最終打ち合わせを行った。また、事前研修では、参加者同士のメール等のネットワークを作り、2週間の準備期間に4名のリーダーから各班の参加者との意思疎通ができるようにした。

メインキャンプまでの働きかけ

メインキャンプまでの2週間、各イベント進行の腹案を用意しつつ、あえてこちらからリーダー会設定の指示を出さず、連絡のみとっていたところ、集まれるリーダー同士や他の参加者が所外にて3回ほど話し合いを持ち、計画を立案してきた。必要な物品等については最大限手配を行った。前泊でのリーダー会と教材準備には、8名の参加者があった。

メインキャンプでの働きかけ

このキャンプは、「誰かが誰かのためにしてあげるキャンプではなく、みんなでするキャンプ、各自ができる範囲で参加しみんなで作り上げるキャンプ」ということを徹底して伝え、本人や家族とも一緒に準備や片付けに参加できるようにした。そういった方針の中で、各班が時間枠の中で計画どおり活動するのを見届けた。(小さな失敗や、もどかしさのある進行などは、じっと我慢して見ていると、周りのボランティア受講者や保護者らが、もり立てたり、補ったりするようになった。)

4 事業の展開の実際

発表時に、映像を使って紹介する。

5 アンケート(自由記述)から 抜粋

(1) 事業の内容について

事業全体

- ・とてもよかったですと思います。ボラの主体性をいかしてくださり本当に感謝です。
- ・学べました。楽しかったです。
- ・あっという間で夢中な3日間でした。
- ・すごく細かく計画が立っていて子どもたちのこと、段取りも全員が協力していました。

事業のプログラム

- ・自由度が高く参加者もとてもゆったりしていたと思います。
- ・ゆったりしていて良かった。
- ・忙しい面もあったけど、濃い。
- ・自由に遊んだり、調理の手伝いをしたり、子どもたちがのびのび過ごせているように凄いと感じました。

事業の運営

- ・自分たちにまだまだ課題あります。
- ・実行委員(リーダー)の熱い気持ち伝わりました。
- ・間延びしてしまって...でももりあがっていてよかった。

- ・職員さん、運営さん(リーダー)の一生懸命な姿勢が良かった。
- ・ファイヤーなど、臨機応変に良い方に切り替えられて安心しました。

職員の指導・助言や対応

- ・ただただ感謝です。
- ・関根さん(専門家)すてきです。みなさんありがとうございます。
- ・関根先生すごくすごくよかった。関根先生がいたからがんばれた。ありがとうございました。
- ・物品等、運営に関していろいろ補助していただきありがとうございました。
- ・あったかくて、いろいろわがまましたけれど見守ってくれてありがとう。
- ・職員の方が盛り上げたり、ボランティアへの声かけはとてもあたたかく、もっとやってみようという気持ちにさせていただきました。

(2) 各活動の内容

9月13日 班別活動の準備

- ・主体性に支えられた活動だったと思います。
- ・スムーズに進み、少人数でわいわい楽しかったです。
- ・準備していてスムーズにいった。
- ・事前打ち合わせ不足のため、なかなか内容がつまりきらずに終わってしまいました。
- ・自主的に動けなかった。自分自身の内容の共通理解が少なかった。

9月13日 メインキャンプ1日目

- ・おっかなびっくりしていました。
- ・緊張していて、うまくいかないことが多かった。
- ・いろいろ悩んだ。いろいろ考えた。苦しかった。
- ・トラブルもありましたが、けがなく終えられホッとしました。
- ・子どもと仲良くなろうと精一杯になってしまったので、活動をこなすことでいっぱいいっぱいでした。
- ・本人(子ども)の一生懸命取り組む姿がうれしかった。
- ・食事のことで頭がいっぱいだったけれど、事前の時と比べ子どもの表情の変化があって良かった。

9月14日 メインキャンプ2日目

- ・1日目をふまえ、改善が行えた。
- ・ご家族の思いを知って、すごく力になりたいと思いました。
- ・なんだか和やかな雰囲気楽しくできました。
- ・別れが寂しくて…。せっかく仲良くなれたのに…。別れは早いなぁと感じました。でも、後悔のない楽しいキャンプになりました。
- ・自分のやりたいことやりたいだけできた。収穫いっぱい。

- ・虹色笑顔でみんなが帰ることができよかった。
- ・子どもたちの落ち着いて遊んでいる姿を見て、子どもたちもファミリーもボラもすごいなって思った。
- ・朝食の配膳時の様子がとても暖かかったです。

9月14日 ふりかえり と情報交換会

- ・それぞれの関わり方を見て、今までにない視野を持てたと思います。
- ・ふりかえりって、たいせつですねー。
- ・このようにしっかりふりかえったことがなかったので、とても勉強になりました。
- ・講師の関根先生の言葉が強く心に響きました。
- ・得たものは、腹割って話さないといけないものばかり。よかった。
- ・班でもパートナーでもたくさんの気づきがあり、今後に生かそうと思いました。情報交換会もキャンプのことだけでなくいろんな話ができ楽しかったです。
- ・ほめられて超超うれしかった。自信になった。みんなすごいなあって思った。初めてうれし涙でした。がんばってよかった。信じてよかった。来てよかったって思えた。

9月15日 パネルディスカッションとふりかえり

- ・みんなのいろんな思いを知って、なんだか頑張りたい気持ちです。
- ・もっと時間ほしかった。もっといろんな人の意見、いろんな考え聞きたかった。
- ・障害者の現状を新たに知ることができました。みんなの思いが聞けて良かったです。今後の活力になりました。
- ・教育現場、社会、いろいろな現場、そして今後の課題が見つかった。
- ・居場所、継続性、連続性、連携 考えさせられるものがあつた。

(3) この事業に参加して、あなたが「持ち帰りたい」と思ったことは？

- ・申し訳ないですが、言葉になりません。「想い」です。
- ・様々な人の思いと熱意。
- ・ふりかえりの方法と流れ
- ・パネルで学んだみんなの思いを自分が今後どう生かせるか…。
- ・本当の居場所作りを提供できるようになりたい。
- ・一人ひとりを大切にすること。
- ・ほめることの大切さ。長く続く一生懸命！！（さぼってもいいんだよ）
- ・障害者とふれあいで得た「待つ」ことの大切さ。
- ・保護者の方との関わり方や活動での子どもたちへの配慮等、スタッフすべての心遣いを学び、今後の活動にいかしたいと感じました。

(4) 本所の今後に期待することは？

- ・今後も人材を育成する姿勢でいてください。

- ・来年も行ってほしい。
- ・来年もこういう企画にぜひ参加したい。
- ・参加者から「来年も期待しています」という声がありました。所の事業としてもボラの自主企画でも良いのでまた続けていきたいです。
- ・「つながり」を大切にしたい企画。キャンプが終わったから終わりじゃなくて、これからもつながっていけるような架け橋みたいな事業を企画してほしい。これっ
きりじゃ...

成果と課題

1 取り組みの成果

- ・参加者の意識の高まりと変容が見られた。また、来年度同企画が実施できるかどうか分からない現状を伝えると、できない場合はボランティア企画として実施したいという施設ボランティア間の意識が高まった。総じて参加者としての意識から当事者としての意識に変化した者が増えた。

2 今後の課題

- ・今後、施設ボランティアを総合的にどのように育てていくのか。そして、「ユース・パートナーキャンプ」という「つどいの場」をどうしていくのかが課題である。